

指定質問2「記憶を紡ぎ出す「場」を巡る問い」

片山 知哉（立命館大学大学院 先端総合学術研究科 院生）

---

私は、先ほどの小宅さんと同様、ヤング先生のご著書である『PTSDの医療人類学』を読んだ中で、自分の中に浮かび上がってきた問いについてここで質問させていただきたいと思います。

『PTSDの医療人類学』において、ヤング先生は外傷性記憶の概念の歴史を辿り、これを「記憶の可塑性」という点から批判的に検討なさっています。

「外傷性記憶」とは、外傷が生じた時点での事実をそのままに保持するもの、従ってそれは過去の不正義を証するものであり、真実の配達人であり、それは現在の文脈によって変容するものではないと一般に思われているものです。しかもこれは、本人にも隠蔽された記憶であり、そこへのアクセスは医療専門家のみが可能であるとされます。そしてこれこそが、PTSD概念を支える根幹に位置しているものなのです。

しかしヤング先生は、これは二重の意味で無時間的な真理ではないと指摘しています。第一に、外傷性記憶の内容についてです。外傷性記憶の個々の内容は、それを保持する本人の置かれた現在の文脈に依存し、後追的に構成されうる、というのがその理由です。そして第二に、外傷性記憶の概念についてです。外傷性記憶という概念は、それ自体が歴史性を持つものであって、臨床家と研究者が、その前提条件である実地医療と技術を作り出すまでは存在しなかった。すなわち苦痛はリアルであるし、PTSDもまた現在リアルなものとして我々が感受するにせよ、PTSDという概念装置は、無時間的な真理ではない。

私はこの指摘に深く感銘を受けたものであります。私個人の経験、精神科医としての経験になりますが、そこで感じてきたリアリティを言い当てていると感じたからです。

私が仕事を通じてお会いしてきた精神科ユーザーたちは、外傷性記憶と呼び得る事態を感受しているとしても、それは現在本人が置かれた文脈抜きに理解することはできない。その記憶は繰り返される幾重もの現在のたびご

とに、新たに再びそれを外傷性記憶として同定され、意味を付与され、織り上げられていく。そのようにして、その記憶は不変なるものとして生成され続けているのです。

こう言ったからといって、ユーザーの体験の意味を価値下げしたり、ましてその記憶がリアルでないとするにはならない。むしろ、ユーザー本人が現在置かれている文脈を、そこに存在する社会的抑圧や苦痛を見つめることこそが治療的な意味を持つのであるし、意識が過去の出来事へと収斂してしまうメカニズムと背景を問うことのない回復はあり得ないと考えるからです。そして、本人がつむぎだす新たな記憶とは、はるかに豊かな役割を有しており、そのような記憶を単に真偽を明かす証人の地位に切り下げてしまうことによる弊害こそ銘記されるべきだと考えるのです。

その上で、私がヤング先生に伺いたいのは、そのような記憶をつむぎだす「場」についてどのように位置づけていらっしゃるのか、ということです。現在、医療の専門家も、運動家たちも、そろってそのような「場」を重視しているように思われます。同じ体験を有する本人たちの集団の中でこそ、新たな語りをつむぎ、回復を進めるための力が備給されるのだという期待がそこにはあります。だがそれは、無条件的な真実なのでしょうか。

ヤング先生は『PTSDの医療人類学』第5～7章において、医療専門職によって本人たちにイデオロギーが注入されていく有様を詳細に記述なさっています。そこでも、同じ体験を有する者同士の相互作用はあり、新たな記憶がつむがれ、またそのことを医療専門職の側も期待していた。だがそこにあるのは、医療専門職の側が仕立て上げた PTSD 像に、本人たちを一方向的に当てはめようとする事態であり、本来あり得たはずの多様な記憶はごく一面的に切り取られ、あとは捨象されてしまっている。それは奇妙で不快な場面であり、私もまたこれを肯定することはできないと感じます。

しかし、それを認めるにしても、医療専門職が支配する場でないのであれば、そのような事態は避けられるのか。同じ体験を持つものだけが存在する場であれば、自然発生的に対等で深いピア関係が生まれ、多様で複雑な自身の全体が受け止められ、適切な語りがつむがれるのだろうか。あるいは運

動家たちはそう信じたいかもしれませんが、私はこれも無条件で肯定はできないと思います。正当化のためのメカニズムを有し、抵抗も生じるような「イデオロギー」の注入は、そのような場でも生じ得るし、自身の一面しか承認されないような事態もやはり生じ得る。

その指摘に際し、精神科医としてではなく、一人のゲイとしての経験を振り返ってみたいと思います。常に抑圧を受け続けるマイノリティの心理的特性を、複雑性 PTSD、あるいはその類似のものとして記述する動きがありますので、やや強引な例示かもしれませんが、ご寛容を願います。

近年変化してきたとは言うものの、ゲイの集まる場は、決して一枚岩ではありません。それは、私が他のゲイたちと関わりを持ち始めた10年前には今よりも強かったし、友人がそうであった20年前はもっと強かったと聞いています。とはいえ今も昔も、そのような場が強く求められる状況に変わりはありません。そうした中で、ゲイ・アクティビズムにおいては、ホモフォビアやヘテロセクシズムという概念によって自分の状況を振り返ったり、カミングアウトを一つのメルクマールとするような空気がありました。それは先達が新入りに注入していく、反証不可能なイデオロギーだったと言っていいでしょう。確かにそれは私に、自分が受けている社会的抑圧の一部を教え、そこから逃れる方法の一部を教えましたが、そのように自分の体験が切り取られその側面で解釈されることに、違和感と逃れ難さも感じたのです。

一方でゲイバーにおいては、まるで違ったハビトゥス、あるいはカルチャーがありました。そこで必要なスキルとは、その場でいかに盛り上がる事ができるかであって、実生活を積極的に切り離すスタイルが必要でした。いや、そのような二重生活を選び取ること自体がイデオロギーであったでしょう。そこは私に、前言語的な快を教えてくださいましたし、その場で出会う仲間は私にとって大切なものではありました。しかし姓名も知らず、住所も職業も知らない大勢の顔を思い浮かべるとき、また実生活における差別や困難を語ることを避ける空気を思い出すとき、そこにいたのは一体誰であったのか、そこでの語りとは一体何であったのか、と虚脱感を覚えた自分を思い出します。

その二つは、まるで異なる空間でした。そして対立がありました。

ゲイ・コミュニティと呼ばれるゲイ全員が帰属できる場など、あったためしがありません。孤島のように小さな集団が、不安定なままに点在し、そこに人はしがみつく。それだけのことでした。一体どこに、自然発生的に対等で深いピア関係が生まれ、多様で複雑な自身の全体が受け止められ、適切な語りがつむがれる場があったのだろうか。そうしたつむぎは時に発生するが、無条件に起こるものではなく、そして私自身はといえば、その両者のイデオロギーにある種抵抗し、しかし部分的に取り入れ、断片化された語りをつむぎつつ、その間を生きています。そのような、複数の場を同時に持ち得るのは通常マジョリティにとってはごく当たり前のことなのですが、それは現在にあっても、まだ誰にとっても容易に持ち得る事態ではなく、私は自分の置かれた文脈の偶然を常に意識させられます。

重ねてヤング先生に質問させていただきます。

第一に、ヤング先生が『PTSDの医療人類学』で記述されたイデオロギーの注入は、私が思うに、形式的には比較的ありふれたことではないでしょうか。そこに質的な差異、良いものと悪いものとの差異はあるのでしょうか。

第二に、その「場」でのイデオロギーは、確かに一方では自分の語りのつむぎを助けるものでありつつ、しかし一方ではその枠の中でしか認められない縛りでもある、という両面を持っているのではないのでしょうか。換言すれば、承認と排除が表裏一体となって存在しているのではないのでしょうか。

第三に、マイノリティは、その置かれた社会的抑圧という文脈ゆえに承認の場を強く必要とし、その結果として自由に語りの場を選ぶことも、またそこから自由に撤退することも難しいために、マジョリティと比較して困難が生じるのだと言えるのではないのでしょうか。そしてそれこそが、マイノリティの語りのつむぎの困難性なのではないのでしょうか。

こうした場をめぐる困難性について、ヤング先生のお考えを聞かせてください（拍手）

（佐藤）片山さん、どうもありがとうございます。二人の大学院生から出

された指定質問は、PTSD を中核として、異なる方向からの質問だったと思いますが、これに対してアラン・ヤング先生にお答えいただき、それを通訳の方と宮坂先生に適宜通訳していただくということでもよろしく願いいたします。